

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01557

研究課題名(和文)「高さ」を疑う、「高さ」を背負う 新しい都市ガバナンスの社会学

研究課題名(英文) Questioning Tallness, Living Vertically: Sociology of New Urban Governance

研究代表者

町村 敬志 (MACHIMURA, Takashi)

一橋大学・大学院社会学研究科・特任教授

研究者番号：00173774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,900,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀を迎え、世界の大都市は新たな「高さ」の時代と向き合いつつある。超高層化する都市は人間の環境として持続可能なのか。COVID-19という新しい事態を踏まえ、本研究は、深刻な影響を受けた各種イベントスペースの生き残りという観点から、建造環境としての都市の変容とレジリエンスの形を探究した。東京圏のイベントスペースとその利用者を対象とする調査から、リアルとオンラインを組合せながら危機を乗り越える諸実践の厚み、そして「高さ」を含む都市の建造環境がそれら実践と関わる経路がきわめて多様で柔軟であることが、明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人口縮小期に向かう都市は「超高層」とどう向き合っていくべきか。「高さ」の問題は人間と環境の関係を考える際の、隠れた重要課題としてある。COVID-19はリアルな都市に大きな打撃を与えた。しかし打撃を受けたイベントスペースをめぐっては、設置者・利用者双方が多様で柔軟な生き残り策を展開していた。リアルな都市を舞台に、脱場所化と再場所化を状況に応じて使い分けながら、レジリエンスを日々再構築していく実践が試されている。高層化する現代都市の基層には、同時に、「高さ」を飼いながら営みが埋め込まれていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：In the 21st century, the world's largest cities have entered a new era of the "height." Is a skyscraper city sustainable as a human environment? Based on the new situation of COVID-19, this research explored the transformation of the city as a built environment and the form of resilience from the viewpoint of survival of various event spaces that were seriously affected. From a series of surveys of event spaces and their users in the Tokyo area, we learn that the depth of daily practices that overcome crises while combining real and online, and the multiplicity and flexibility of routes through which built environments including "height" are related to those practices in an urban setting.

研究分野：社会学

キーワード：社会学 都市 イベントスペース COVID-19 自粛 ガバナンス 超高層 社会運動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

21世紀を迎え、世界の大都市は急激な「高さ」の時代に足を踏み入れることとなった。東京もその例外ではなかった。ここでいくつかの疑問を提起できる。第1に、世界的に増加したとはいえ、実際には超高層建造物の3分の2が東アジア・東南アジア(とりわけ中国・韓国・日本)に集中する。対して英国、フランス、ドイツでは同時期にわずかしか建っていない(CTBUH資料より算出)。なぜこのように極端な不均衡が生まれるのか。なぜアジアは「タワー」好きなのか。第2に、日本都市についてはより丁寧な議論が必要である。超高層化するアジアといっても、日本と他では状況が異なる。他のアジアメガシティ(とくに中国)では急激な経済成長の進展プロセスと並行して超高層化が進んだのと同様に、2000年代東京では長期の停滞が続いていた。東京の場合、顕著な経済成長が見られなかったにもかかわらず、なぜ超高層化が進んだのか。

東京は、高度成長やバブル期を通じ、むしろ超高層化しない都市として人口を吸収し、成長を実現してきた。東京の特徴とは、超高層ビルを林立させずに世界最大のメガシティを実現したことにある。だが、「建てずに済ませていた」都市は変貌を遂げた。それは何をもたらしたのか。

2. 研究の目的

都市の「高さ」という問いは、近年世界的な注目を集めている。学術的視点から見ると、それは、いくつかの積み重なる課題を提起している。

第1に、格差問題が深刻化する現代都市において、建造空間は異なる階級階層や産業の間でいかに配分・再配分されているのか。超高層化は下層住民を排除し上層住民への入れ替えを促すジェントリフィケーションとしてしばしば進行する。その一方で超高層化は、遠距離郊外居住を強いられていた中堅所得層がより職住近接の条件で住宅取得できるようになる過程でもあると指摘された。高さとの階層性の関連、そしてその変化の方向性はどのように理解すべきか。

第2に、グローバル化・情報化・新自由主義化に直面した社会は、速度、高度、密度、規制などの与件をリセットしながら、社会と空間の結びつきをいかに再構築しつつあるのか。とりわけ垂直性(Vertical)を軸にした再構築は、高密度を工学的に実現することで社会をコンパクト化する一方、水平的に拡散していた都市(たとえば郊外)を空洞化させる可能性がある。それは近代都市の新たな展開なのか、それとも近代都市がその終焉に近づく一步を意味するのか。

第3に、歴史的・思想的な視点からの再吟味が欠かせない。近代超高層のルーツは「摩天楼」の故郷アメリカにある。なぜアメリカで巨大な建築物が誕生し受容されたのか。トクヴィルは『アメリカのデモクラシー』のなかで、「民主的国民にあっては、個人の力は非常に弱い。だが、万人を代表し、万人を掌握している国家の力はきわめて強い。・・・民主社会では、自分自身を思い浮かべるとき、人々の想像力は萎縮する。国家を思うとき、それは無限に拡大する。そのため、狭い家ですましく暮らしている人たちが、しばしば、公共の記念碑となると、とたんに巨大なものを計画する(松本礼二訳、岩波文庫、第二巻下:97)」と指摘した。現代の「巨大化する想像力」はどのような思想的・政治的基盤の上に姿を現すのか。それに対処するのは、どのような知なのか。理工の領域を超える知の厚みがそこでは試されている。

以上の俯瞰的な課題を念頭に置いた上で、本研究は次のような問いを具体的な目的として設定した。1) 超高層化する都市ははたして持続可能なのか。2) 人口縮小期に向かう都市は「高さ」とどのように向き合っていくべきか。3) 大きな転換にさらされながら都市の具体的な現場では、持続や新たな創造に向け、どのような都市の実践が展開を始めているのか。

3. 研究の方法

一連の問いを具体的に考察するため、(A) 超高層化の基礎データ作成と要因分析、(B) 超高層化が都市空間利用へ及ぼす影響分析、(C) 超高層化をやり過ごす実践の国際比較について準備を進めた。(A)(B)の作業を進めながら、軸となる(C)について、超高層の先進地でもある香港・深圳での2020年3月調査に向け現地研究者と連絡を取り合っていた。ところが、新型コロナウイルス感染症(以下 COVID-19)の流行により訪問は困難となった。国内での実地調査も困難な時期が長く続いた。他方で、緊急事態宣言の発出とともに都市空間の利用と建造物の関係はまったく新たな局面を迎えつつあった。そこで、当初の問題意識と研究のねらいを継承しながら、同時代を生きる研究者としての責任を果たすため、COVID-19とその都市的影響に焦点を当て、建造環境としての都市の変容とそれに対する空間利用者側のレジリエンスのあり方を探究するという方向で、研究を進展・継続した。そのため、次のような方法で研究を進めた。

(1) 建築確認に関する基礎データと、今回作成をした東京都内における超高層建造物データベースを用いて、COVID-19直前の再開発や空間紛争の動向について分析を行った。

(2) COVID-19問題が都市・建造物に及ぼす影響のなかでも、人間活動と建造環境の接点にあるイベントの場の変化に着目し、東京都内におけるイベントスペースの最新リストを作成した。これをもとに、COVID-19に伴う緊急事態宣言とその前後におけるスペースの持続と「自粛」の実態について、ネット情報や聞き取りにより包括的なデータ(2020年9月時点)を作成した。

(3) COVID-19下におけるイベントスペース利用者側の空間利用やオンライン活用などの実践を具体的に明らかにするため、1都3県に居住するイベントスペース利用者を対象とするウェブ調査を2度実施した(対象は20歳代~60歳代の各種イベントスペース利用経験者。回答者は、第1回調査:計1244名(2021年3月実施)、第2回調査:計1560名(2022年2月実施))。

4. 研究成果

研究の進展とともに得られた成果を、日本都市社会学会大会（2020年9月、2021年9月）、日本社会学会大会（2020年10月、2021年11月）、地域社会学会大会（2021年5月）ほかにおいて発表するとともに、日本語および英語により論文および単行本として公刊した。おもな結果を以下に要約的に紹介していく。

(1) 「東京イベントスペース 2020」データセットの作成と分析

演劇・音楽・芸能・ライブ・ファン活動・市民活動・社会運動などのための空間を「イベントスペース」と考え、各種目録・情報源、報道記事などにより、東京23区について計2,389施設をリストアップした。その上で、施設HP、報道記事、電話等により2020年3~9月のイベントスペースの休業状況やクラウドファンディング、「自粛」に関する諸活動を調査した。これによりデータセット「東京イベントスペース 2020」を作成した。

2020年4~5月の緊急事態宣言中、イベントスペースはイベント中止や休業を余儀なくされ、90%以上の施設が休業した。強制力はないが、多くのイベントスペース設置者や利用者が感染予防という点から協力行動をとった。そうした中、イベント継続やイベントスペース維持を図る試みが様々な形で続けられた。たとえば「自粛」による経済的影響が大きいクラブ・ライブハウスは、利用客とのつながりを生かした「自助・共助」や公的保障など「公助」を求める動きを展開させた。イベント継続の試みとしてオンライン開催が、文化から社会運動に至る幅広い領域で広がった。それは、感染予防とイベント開催を両立させる中での苦肉の策だった。集会を通じたメッセージ発信や相互交流を重視する社会運動団体の場合、「自粛」は大きな障害であり、自前スペースや屋外で感染対策を取りつつ対面式の集会開催を模索したケースが目立った。

(2) 都市空間のアクティブ活用者層による COVID-19 対応にみるレジリエンスの複層的な形

都市空間のアクティブ活用者層は、リスク社会化（パンデミック）に直面する都市において、建造環境とメディア空間を日常実践の中でいかに接続させていったのか。イベントスペース利用者調査（第1回）の結果をもとに、繰り返される流行と緊急事態宣言の波の中で、イベントスペース活用をめぐる行動が連鎖的にいかに変容していったのかを分析した。各時点の参加度の変容から計算した得点をもとにしたクラスター分析の結果、コロナ禍段階ごとのリアルな場所でのイベント参加変容について、つぎの4つのパターンが析出された。①高度「自粛」型：リアルなスペースを一貫して「ホーム」から遠く眺める。②低度「自粛」型：「自粛」から自由になってリアルなイベントスペースにこだわり続ける。③低度調整型：「危機/緩和」の差に感応しつつリアルなスペースへの回帰を緩やかに模索する。④高度調整型：「危機/緩和」をクリアに使い分けながら、リアルへの回帰を試行する。多様な行動連鎖が組み合わされる中で、「意図しない帰結としての脱/再場所化」が、COVID-19下の都市では進行した。「自粛」下でもリアルな都市は死んでいない。ただし「自粛」にせよリアルスペース維持にせよ、選択は単純な二者択一ではなく、脱場所化も再場所化も状況依存的に相互に往還し合う潜在的な契機を孕みながら事態は進行したと考えられる。それは創造的なレジリエンスを体現する日常実践のひとつの形で、そうした力は高層化する現代都市の基層にも存在するものと考えられる。

(3) 都市空間のアクティブ活用者層からみた好ましい「都市のかたち」の分岐

都市イベント空間のアクティブな活用者として COVID-19 に伴う諸問題を2年間にわたって経験し、累積的な対応を重ねてきた層は、建造環境としての都市のあり方に対し、どのような「理想」を抱いているのか。2022年2月に実施した第2回調査では、「コロナ後の都市の姿として望ましいと思うイメージ」に関して4つの対比を質問項目に含めた（A<多少個性が失われても、安全や安心を提供できるありふれた街 vs. 多少リスクがあっても、密集や猥雑さを提供できる個性的な街>、B<インターネットの世界と継ぎ目なく接続された利便性の高い都市 vs. リアルの世界を大切にす、ほどほどにスマートな都市>、C<超高層ビルを中心とする立体的でコンパクトな都市 vs. 中小建造物（10階未満）を中心とする水平的に広がる都市>、D<グローバルな競争にも乗り出す成長重視の都市 vs. ローカルな社会を大切にする「脱成長」型の都市>）。導入的な分析から、「高層化」志向（C）は「スマート都市」志向（B）や「グローバル成長」志向（D）と親和性をもつ形で選好されていることがわかった。これに対し、CとAの組合せでは、「安全安心」志向を強くもつ層が「高層化」志向と「中小化志向」という異なる方向に分岐する傾向がある、という特徴的な結果がでた。リスク社会化状況の下で、都市空間活用のアクティブ層自体も、都市の「高さ」への選好という点で一枚岩ではない。「高さ」自体がさまざまな質的差異を含む可能性、「高さ」を掘り崩していく日常実践の可能性など、探究すべき新たなテーマの存在が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 町村 敬志, 長島 祐基, 栗原 真史, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 辰巳 智行, Fung, Wan Yin Kimberly, 山内 智瑛	4. 巻 13
2. 論文標題 COVID-19「自粛」とイベントスペース：「東京イベントスペース2020」データ分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一橋社会科学	6. 最初と最後の頁 91～115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/71964	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 町村 敬志	4. 巻 1
2. 論文標題 危機における新たな「介入の政治」とその都市的意味 新型コロナウイルス対応から浮かび上がる<ヒトモノコト>共編成過程としての都市・地域	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域社会学会ジャーナル	6. 最初と最後の頁 55～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 丸山 真央	4. 巻 20
2. 論文標題 大都市の「草の根保守」は変わったのか 「大阪維新の会」の地域政治の社会学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フォーラム現代社会学	6. 最初と最後の頁 52～65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 町村 敬志	4. 巻 44
2. 論文標題 新型コロナウイルスと「連鎖の社会学」 都市の現在をどうとらえるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 計画行政	6. 最初と最後の頁 15～20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 MACHIMURA Takashi	4. 巻 30
2. 論文標題 Gentrification without Gentry in a Declining Global City?: Vertical Expansion of Tokyo and Its Urban Meaning	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Japanese Sociology	6. 最初と最後の頁 6~22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ijjs.12126	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丸山 真央	4. 巻 107
2. 論文標題 都心マンション・コミュニティの可能性 社会学の視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 すまいるん	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 町村 敬志	4. 巻 12
2. 論文標題 「世界都市」と呼ばれた時代 「グローバル化」史からみた東京の1980年代を再考する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計15件(うち招待講演 4件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 小股 遼, 栗原 真史, 長島 祐基, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 辰巳 智行, Fung Wan Yin Kimberly, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 新型コロナ禍におけるイベントスペース利用者調査から(1) ジャンルによる「自粛」の違いと代替スペースの分析
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会(東京都立大学・オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山内 智瑛
2. 発表標題 新型コロナ禍におけるイベントスペース利用者調査から(2) クラブ・ライブハウス利用者の支援行動とスペースの存続
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会(東京都立大学・オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉山 怜美
2. 発表標題 新型コロナ禍におけるイベントスペース利用者調査から(3)ー参加者の行動変容から再考するオタク文化と対面イベントの関係性
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会(東京都立大学・オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栗原 真史, 長島 祐基, 小股 遼, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 辰巳 智行, Fung Wan Yin Kimberly, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 イベント参加をめぐる行動変容と脱場所化・再場所化 新型コロナ禍におけるイベントスペース利用者調査から
3. 学会等名 日本都市社会学会 第39回大会(オンライン)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 町村 敬志
2. 発表標題 危機における新たな「介入の政治」とその都市的意味 新型コロナウイルス対応から浮かび上がる<ヒト モノ コト>共編成過程としての都市・地域
3. 学会等名 地域社会学会 第46回大会(オンライン)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辰巳 智行, Fung Wan Yin Kimberly, 栗原 真史, 長島 祐基, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 COVID-19「自粛」とイベントスペース 東京イベントスペース調査2020から(1)
3. 学会等名 日本都市社会学会 第38回大会(オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高橋 絢子, Fung Wan Yin Kimberly, 栗原 真史, 長島 祐基, 杉山 怜美, 辰巳 智行, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 COVID-19「自粛」下のクラブ・ライブハウスの生き残り戦略 東京イベントスペース調査 2020 から(2)
3. 学会等名 日本都市社会学会 第38回大会(オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉山 怜美, Fung Wan Yin Kimberly, 栗原 真史, 高橋 絢子, 辰巳 智行, 長島 祐基, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 COVID-19「自粛」下の同人誌即売会とリアルスペース 東京イベントスペース調査2020から(3)
3. 学会等名 日本都市社会学会 第38回大会(オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栗原 真史, Fung Wan Yin Kimberly, 長島 祐基, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 辰巳 智行, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 COVID-19「自粛」下における施設形態とイベントスペースの危機 東京イベントスペース調査2020から(1)
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会(松山大学・オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長島 祐基, 栗原 真史, Fung Wan Yin Kimberly, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 辰巳 智行, 山内 智瑛, 町村 敬志
2. 発表標題 COVID-19「自粛」下の社会運動とスペース 東京イベントスペース調査2020から(2)
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会(松山大学・オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山内 智瑛, Fung Wan Yin Kimberly, 栗原 真史, 長島 祐基, 杉山 怜美, 高橋 絢子, 辰巳 智行, 町村 敬志
2. 発表標題 COVID-19「自粛」下におけるナイトライフの生存戦略 東京イベントスペース調査2020から(3)
3. 学会等名 第93回日本社会学会大会(松山大学・オンライン)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 MACHIMURA Takashi
2. 発表標題 Diversified forms of public space in Asian contexts: Common conditions of future for security and equality
3. 学会等名 23rd Biennial AASSREC Conference (Vietnam Academy of Social Sciences) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MACHIMURA Takashi
2. 発表標題 The Policy Coalition for the “Global City 2.0”? :Changing Local Power Structures and the Position of Civil Society Organizations in Tokyo
3. 学会等名 VSJF:Annual Conference of the German Association for Social Science Research on Japan “Metropolitan Japan in Historical and Contemporary Perspective” (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MACHIMURA Takashi
2. 発表標題 Is public space still “public”? :Common conditions of Asian urban future for equality and fairness
3. 学会等名 Taiwan Sociological Association Annual Meeting (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MACHIMURA Takashi
2. 発表標題 Losing Control in Further Globalization?: Challenges and Difficulties of Tokyo as a Post-global City
3. 学会等名 Bousfield Distinguished Visitorship in Planning hosted by the Department of Geography and Planning at the University of Toronto (招待講演)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 町村 敬志	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 358
3. 書名 都市に聴け アーバン・スタディーズから読み解く東京	

〔産業財産権〕

〔その他〕

町村敬志研究室ウェブサイト www://machimura.sakura.ne.jp/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	植田 剛史 (Ueda Takefumi) (30709267)	愛知大学・文学部・准教授 (33901)	
研究分担者	山本 唯人 (Yamamoto Tadahito) (50414074)	法政大学・大原社会問題研究所・准教授 (32675)	
研究分担者	丸山 真央 (Maruyama Masao) (80551374)	滋賀県立大学・人間文化学部・教授 (24201)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	馮 蘊妍 (FUNG Wan Yin Kimberly)		
研究協力者	栗原 真史 (KURIHARA Masashi)		
研究協力者	長島 祐基 (NAGASHIMA Yuki)		
研究協力者	小股 遼 (OMATA Ryo)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	杉山 怜美 (SUGIYAMA Satomi)		
研究協力者	高橋 絢子 (TAKAHASHI Hiroko)		
研究協力者	辰巳 智行 (TATSUMI Tomoyuki)		
研究協力者	山内 智瑛 (YAMAUCHI Chie)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関